私のアスペルガー症候群と機能不全国家

たなっちさゆちん

取り返しのつかない極端な行動は例外なくそうした状況で起きている。

学校や職場にも居場所がないと感じているうえに家庭にまで居場所がなくなったとき、思いつめた激しい行動に走ってしまいやすい。私はアスペルガー症候群。発達障害者である。二九歳の、今から一年前にその診断がされた。

私には八歳になる子供がいる。でも今は一緒に暮らしてはいない。元の夫が彼女を引き取り、生粋の農家の片田舎で育てられている。

私は、彼と大学二年で知り合い、恋愛のなかになった。私は、パニック障害のような精神的な病を患い、学業の成績はおろか、単位すら危ぶまれていた。

高校で通用していた対人スキルは、大学では通用せず、女子大生の花形のような同級生にそうすかんをくらっていた。私の家は彼女たちの家のように、大金持ちの成金主義ではなく、普通の地方公務員であった。

ペンケースすらプラダの三角がきらりと光るようなお嬢さんたちと、テストのときのみ擦り寄ってこられる理解のしがたい関係でそんな彼女らと仲良くなれるはずもなかった。

私は、彼に結婚を迫り、快く承諾してくれた元の夫には今思うと大変申し訳なかった。

自分が学生の身分から逃げおおすために踏み出した結婚という決断は、私の人生で一番痛い傷をおうことになる。

結納の日、すでに夫は夫の母の長男であった。義父は、「子供が増えるみたいなもの」といって、わははと豪快に笑い、私たちの結婚よりも義理の姉の自慢話に終始した。

その会話の中で、私が父の言葉にたてつくような言い方をすると、義母は「子のこの目上に対する口のききかたはどうかと思う」と私を見ずに冷ややかな目で言い

放った。
父は「人は年齢関係なく、平であると思っています。これはこれでいいんではないでしょうか」といった。義母の目がいっそう冷ややかになった。
元の夫は、それにも知れずへらへらしていた。
そして続く義理の姉の自慢話。
父は酔いつぶれて寝てしまった。母は父に「失礼よ。お父さん」となだめるが、私の心は言いようのないもやもやに包まれていた。
母には、怒ってほしかった。「子供たちの結納ですよ」そんなふうに。

私の実家は、アダルトチルドレンの一家である。
祖母の母は、祖母が小学生の時に亡くなり、障害者の兄、二歳の妹、まだ若い父の虐待の中、すさまじい貧困で生きてきた。父は、長男で、そんな祖母に育てられてきた。父はヒーローになりきれないヒーローだった。
ヒーローとはとても良い子で、親の期待どおりに生きることを選択させられる子供のことをいうそうだ。
祖母の父に対する愛情は、依存、そして干渉の連続であった。父は自分を知るきっかけのないまま大人になり、主体性の重要性すら気付かずに生きてしまう。
祖父が死に、相続問題の話し合いの中、祖母は自分の土地の名義を父に譲ろうとはしなかった。それは父の兄弟たちも口ぞえをして、「生きてるうちは、ばあちゃんのよかごとさせてやっとき」と父の行いを誰も労うことはなかった。
先祖の魂を祭り、法事を自分の資産で守ってきたのは他ならぬ父であったのに、そんなことは当然のこととして、誰も感謝すらせず、「私が一番ばあちゃんを看てやっていた」と父の一番すぐの妹が言い放つ。祖母もそのことに便乗し、自分の本心を自分勝手に吐露しだす。
「老人ホームにやられるかもしれんけん、判は押すなて、みんなそういう」
父は必死で祖母のいい子を演じさせられてきた挙句に、ねぎらいの言葉どころか猜疑心と卑劣な感情しかない現実をまのあたりにすることになった。
勉強、就職、金銭、心。全てを母のためにと人生をかけて投げ打ってきた長男が、それでも自分の体裁しか考えていなかった祖母の、兄弟たちの思いに感情ははじけとんだ。

父はそれから、家の中で祖母を迫害した。絶対に口をきかなかったし、食事も一枚の壁を隔てて別々の時間にした。

父の弟だけは、父を労った。「この家は兄貴の力で守ってほしい」

しぶしぶ押された祖母の印鑑の朱肉の色は、父にとってどんな記憶としてしまいこまれているだろうか。

広い田舎の実家の家の周りには、鉢物の植物が二〇〇以上散乱している。広い敷地なのにも関わらず、母は草むしりしかさせてもらえない。ずっと、祖母が根付いているのを象徴しているようであった。

もの静かな母は、あまり社交的ではなかったので、父とのお見合いの際におだやかで純朴な雰囲気にひかれたという。しかし、実際は父との人生よりも祖母との生活がメインになった。母にとってとてもストレスの多い日々がはじまる。母に言わせると付録がでかすぎて、失敗した。と悲しい目で遠くを見た。

育児も自分の思うままにさせてもらえない。夫と自由な会話も出来ない。どこかに行くお金もないし、誰とも心を分かち合える会話が出来ない。

当時父は祖母に加担して生きていなければならなかったし、母はとても寂しかったであろうと思う。

私が元夫の家で、農家の動物虐待や、どの過ぎたマザコンなどに嫌気がさしても、母はあまり私の気持ちに共感はしてくれなかった。

母自身が、ぎりぎりで生きてきて、帰る家にも簡単には帰れないとなると、心は麻痺してゆくのか。いつもそこにいて、心ここにあらずの状態であった。

お母さん、お母さん、どうしてこの人は自分のことすら自分で決められず、お母さんに電話をするのだろう。お父さん、お父さん、どうしてこの人は親の悪態をつきながら、親の背中から出てこようともしない。

そのときその人は、私の生き写しのようにクズで、生きていなくてもいいような人間だった。

ある日、私は身ごもるが、夫は三時になっても帰ってこない。

田舎には消防隊という緊急の町部隊があり若者は訓練をしたあと、いかがわしい飲み屋に繰り出す。

元の夫は「僕はそういうのは嫌なんです」といって、大人の前で大泣きし、飲むだけでいいからと早めに帰してもらうほどのような人物で、それでも、私はぎりぎ

り愛していた。
そのとき何かがとだめになり、元の夫と夜が明けるまで殴りあいの喧嘩になった。私はぐちゃぐちゃの頭で、血だらけ、アクセサリーははじけとび、ただの数珠球。気がついたら、馬乗りになって首を絞められていた。
私は元の夫を殺そうと思いました。
近くにあったゴルフクラブをかすれてゆく視界の中で握り締め、元の夫に振り下ろした。
〝一緒に死ぬのも真っ平。一生お母さんに電話で人生を決めてもらえ。〟
私が気がつくと、父がそばにいました。
私は娘を抱き締め、ぼろくずの自分　立ち上がり生きていこうと車に乗り込みました。何日か実家でこれからのことを考えましたが、私は結局自分を信じることができず、農家の家におずおずと帰らなければならなくなった。そのときのことを悔やみきれずにいる。
ぼろくずの私は、農家のその家に帰ってみると、義理の母と夫はなにを話したのか、人を殺しかけたくせに態度は開き直って、私の人格に問題があることになっていた。それでも行くところはなかったので、頭のおかしい人間で、なんの役にも立たないバカで生きていかなければならなかった。
のちにわかったことだが、人には自己肯定感というものがあるらしい。
それは、どんな人間でも自分に自信を持ち、自分を愛していいのだという、安定した心がまえのことだ。
え？　それって、立派な人間で、人に迷惑をかけず自立して生きていっているような人のみがあじわっていい感情ではないの？　本気でそう思っていたし、とてもカルチャーショックな言葉を知った瞬間だった。
私の家で、私が母に聞いてもらいたいことを、食事時に話すと必ず祖母から返事が返ってくる。母は余計な干渉にそれ以上あいたくなくて口も心もとざすようになっていく。
それでも母は、祖母の相槌をうたされる、話しを聞かされる。父はその間ずっとアルコールにおぼれ、祖父は祖母の多弁に鬱陶しさを覚え、祖母を叱責する。姉はそこにいないように振舞う。私は、どうしても母と会話がしたくて、また話しを投

げかける。
小さな声で母だけに聞こえるように。それでも返事は違う場所から返ってきた。
母はすぐに食事を済ませ、ぶつぶつと独り言を言いながらがしゃがしゃと食器を洗い上げる。
母だって、祖母のどうしようもない噂話よりも、父と夫婦の会話をしたかったのではないだろうか。
私は、家が嫌いであった。バランスが取れていると思い込んでいた家は、とても複雑に、うちだけの常識が交差し、すでに安全基地としての役割をなしてはいなかった。誰が悪いわけでもなく、なにがきっかけなどということもない。
すでに始まっていて、すでに終わっていたのだ。

私の抱えるつらさは、どこにも行く先がなく、知らぬ間にどんどん私のなかでおおきくなっていった。

元夫の家に同居していた知的障害者のおじちゃんとおばちゃんが、小火や、おしっこを漏らすたびに義理の母からぶたれているのを見てとても人間不信に陥っていった。
おじちゃんや、おばちゃんは、農作物を食べに来るいのししをとらえた、汚い小屋の掃除を毎日命じられた。
一畳にも満たない小屋に八匹のいのししが押し込められて、時々おじいさんが気まぐれにいのししを槍で殺した。
そんな時、山からながれてくる川の水に生臭い獣の血の匂いがした。一畳にも満たない小屋の中でいのししは、必死で後方に隠れようと暴れた。
えさと一緒の糞尿が乱気と一緒に飛び散った。

私は、おじちゃんおばちゃんとの共同の住まいで、二階が元夫との住まいであった。トイレには毎日便がこびりつき、玄関からはいのししの糞の匂いがした。
私は、誰かに聞いてほしかった。私は産まれてここに生きているよ。と。誰かに抱きしめて、寂しくないよといってもらいたかった。

私は数々の夜遊びに出かけた。もとより私は育児をさせてもらえなかった。元の夫が義理の母のもとに連れて行ってしまう。元の夫に育児を相談するより、義母に頼る、投げてしまうのが元の夫のやり方だった。

私は、精神薬をたくさん服用していたので母乳はあげられなかった。そして、愛情の表し方もどうしたらいいにかわからなかった。

遊び方がわからない。

可愛いのに可愛いとも思えない。言い表しようのない矛盾。

行くあての見えない人生。母になっても、私は子供の心のまま立ち尽くしていた。

アダルトチルドレンのことを、大学の心理学で学んだ。

私はアダルトチルドレンのことを勘違いしていた。

子供っぽい大人なのではなく、大人になりきれなかった大人の生きずらさを象徴していたのだな。

娘は私が産んだのに私の元から引き剥がされた。歳は二二歳でも、心は小学生の時の、小さな寂しい子供のままであった。

未だに夢にうなされ、何度も家族を殺したり、ＨＥＬＰ！！！と画用紙に書きなぐった夢を見たり。

私の赤ちゃん、、。お母さんは、ここにいて、あなたを生んだことだけは正真正銘の事実だから。

私は家族ではないひとと日々を過ごし、元の夫の家を追い出され、子供も引き取れずに実家に帰ることになった。

実家にもいる場所などなかった。家の金を盗んで夜の間に愛人の家に逃げ込んだ。

「二度と子供を産むな。情けない。しょうもない」父と母はいった。

私は他県の愛人の家で一年ほどを過ごし、また妊娠したが「困る。おろしてくれ」と。

私はまた一人になり、違う男のもとへ。また妊娠。流産。また違う男のもとへ。流産。

私の執拗なまでの落ち込みの中、みんな逃げてしまいたくなったのだろう。

郷に帰り、友人たちとバーベキューをして、帰りに私にお土産をくれた愛人の家からは、幼女のポルノが見つかった。

私はありったけの力でその部屋を破壊した。そして、窓枠にガムテープを貼り、ガスをひねって自殺を図った。つらいために、たくさん睡眠薬を溜め込んでいた。私の切り札となっていたのが人ではなく、死の薬であった。

しかし私は一命をとりとめた。

幼馴染に頼み込み、その家から仕事に通い、自分の人生を取り戻そうとしたが、ある日力尽きた。

私は倒れ、救急車で運ばれた。

汚れちまった命だがまた命を取り留めた。

そして私は、働いた。また友人に助けられながら。友人に声を聞いてもらいながら。

夫と知り合ったのは、ＳＮＳ．夫は私の職場に会いに来てくれた。王子のように私のことを迎えに来てくれた。私の生い立ちも受け止めてくれようとしてくれた。

彫りの深い美男で、日本人にして日本人の風貌ではなかった。

しかし、私たちの息子が産まれ、常識とはかなり異なる行動言動に、私は困惑した。

夫は未診断であったが、私が発達障害を知るきっかけとなった人でおそらく彼もアスペルガー症候群であった。

夫は身重の私をおいて酒をかっくらい車で自殺企画、死にはせずに戻ってきたが、信頼は戻ってこなかった。

そのきっかけも夫が働こうとせず、私のアパートに居座り続けようとして口論になったためであった。

義母から「あんたがぐずぐずしているからよ！」と罵られ、また大量の飲酒をし、子供と死を共有した。

しかし産まれてきてくれたのは、今は一歳の息子。

私の宝物であり、私の生きていく理由。しかしもう依存はしていない。

依存は依存であり、愛情ではない。

パーソナリティーのミイラになってはいけない。

子供を産み様々な支えの中で、タイミングよくある本に出会った。私の人生の全ての謎がそこに書かれてあった。

夫が私の過去を受け止めてくれたように感じていたのも勘違いであることが分かった。

夫が、発達障害だと仮定して言えば、全ての言動に納得がいった

私の言葉や、私の思いは彼の体をすり抜け、向こうのほうに消えてなくなっていた。夫は私を受け止めていてくれたのではなかった。私だけではなく、夫の家族、友人たちの立場にたって考える文化が夫にはなかった。

付き合っていた頃は、私の話をよく聞いてくれ共感してくれているように感じていただけであった。

私が彼の奥さんになってから態度は変わった。あんなに親身になって聞いていてくれたことも悪気なく聞き流されるようになっていった。

彼の中で家族というものは全く気を使う必要のない素の自分でいいのだという概念の文化学習にのっとり私にも優しくする必要性を感じなくなったようだ。

結婚して何年かたつと普通の夫婦も馴れ合いの関係にはなる。

しかしそんな時間のレベルではない。

結婚したその日から私に対する強制的なまでの服従を強いるようになった。

それも、ゆるい真綿のような縄で私の首元に結ばれているようなやり方で。

時にとても無邪気で優しく、しかしずっと監視されているような、見えないラインからは絶対に出してくれようとはしなかった。

私という人間の人格、個性、癖を受け止める玄関は彼になく、まるで小さな窓しかついていない二階から玄関に立つ人を見ているような、窓を時々全開にしてみても相手の姿は変な方向からしか全てを見ることはできないようであった。

定型者の脳みそで考える常識とは、想像を絶するほど、想像力がなく相手の立場にたつことのできない思考回路というのはとても難しく、周りも苦悩を抱える。

私が、母の生い立ちや、苦労を夫にひっそりと語ったときも、夫はまるで聞いていなっかたように、その話しの流れを打ち切って、自分のことをはじめた。

関心がないことには恐ろしく無関心というこの障害であるが、私もそんなことをしているのだと思うとき非常に恐ろしい。

夫と子供を乗せ、誕生日の日、他県で警察沙汰になった。夫と口論になりまた私の意見や頼みごとははばかられた。子供がやっと一歳になった日、高速道路で夫は

私の運転する車のサイドギアをひいた。
夫の運転で子供がかなりの危険にさらされ、危うく大事故。私は夫からびっくりするような言い訳を聞く。
「事故っても相手が悪いからお金は向こうもちだから大丈夫。神経質になりすぎだよ」
子供は一歳にして夫の運転による車で死にかけたのに、夫は子供の立場にすら立てなかった。あくまで自分だけの世界なのだ。
目に見えていても、分からないとはいったいどういう世界なのだろうか。
同じく私も自閉症スペクトラムはあるものの、どうして夫や、夫の立場、子供の立場にたてるようになったのか。

そして、あの時はどうして子供を連れてこられなかったのか。人生に踊らされる自分。

愛着障害という言葉を知る。人格障害、アダルトチルドレン、発達障害、この三つをとても分かりやすく書き記され、その著作者の岡田尊士さんの意思に大変感銘を受ける。
そして、オキシトシンシステムのことを学ぶ。
人が成長する上で、もっとも大切なのは、家族の理解と周囲の環境であると語られていた。
それに恵まれていない現代社会や、障害者の中での自閉症スペクトラムは、特に、発達障害ではなく愛着障害である場合も多いと語られていた。

ちゃんと個性を尊重され、真の愛情をもって育てられた人間は、例え障害があろうともその面を才能にむかわす力を備え、精神的には安定し自立した大人になってゆく。サポートが必要なほど、発達障害めいた症状がでる人に健常者もたくさんいるという。つまり誤診である。

安定した家庭に生まれた発達障害者はその症状はでても改善されやすかったり、精神的にも豊かに育って、ほとんど問題はみられないという。

ところが、環境に恵まれないとそれはただの障害とし、才能は埋もれ、精神的にも全く安定せず、その人物は本来の輝きを封じ込められ、大きなお荷物として生きていかねばならない。

いまや、この障害も未診断もふくめ、一割の人がそれに値いする症状の中生きているという。大変な人材の損失であるし、根本的な人類の営みは生産性の全くないところから始まって、産物として生きていたことを思い出してほしい。

オールマイティなどといった、全員に平均的な基準値を求めるやり方に限界が来ているのは誰もが潜在的に気付いていることであると思う。

鬱、貧困、格差、自然破壊、いじめ、など元をただせばはじめから人は、でこぼこで、同じ生き方など出来ないのである。未だに子供を育てるのは女だけの仕事のように仕向けられている社会がある。

待機児童で預けられないのにどうして一人で子供を育て、稼いでいくというのですか？　どうして、夫から殴られ、生活費をもらえていない現状、紙切れ一枚にこだわり手当てがもらえないのですか？　私が田舎に住んでいるから、発達障害者の支援や働き口が見つからないのですか？　私が大学を卒業していないからですか？親に資産があっても機能不全家族なのに、母子寮にも入らせてもらえなかった。発達障害ゆえに仕事は長く勤まらず、子供の貯金も底をついた。親の資産があるからといって、親の資産を保育料参考にと役所から何度も電話が。保育料、月に六万三千円って、親は何歳まで生きるかわかっていっているのですか？　離婚する人間が悪いですか？　議員さんたちが会議とかで準備されているお茶のペットボトル、それも血税でまかなわれたものですよね。

オールマイティーに働いて、夫婦は健全で、子供を育て、国の将来は安泰だ。めでたしめでたし。

どこの大学をおでになったか知りませんが、えらく頭のいい政治家サンたちが、この国の床にはいつくばって、底辺の真実を知ろうとしないと明日はわが身である。家庭内崩壊は、学校崩壊、社会崩壊の序曲。

私に働く場所も、支援してくれる人も機関も、温かい落ち着いた雰囲気の家族もなく、今時分、もう先が見えない。

誰も悪くないのに、どうしてこうなっていったのか。

私は憤っています。この社会に。

私が早くに自分の発達障害に気付いていれば、私は娘と離れ離れにならずにすんだのか。

私がきちんと、家族のルールにのっとって適応できればよかったのか。

私が、、、。

私は、機関のねじではなくこの国に生まれた人間である。

国は問題行動を、「問題視」して、ただ止めさせようとするのではなく、問題行動にも何らかの機能的な意味があると考えて、機能側面から行動を分析し、問題行動を減らす取り組みが必要である。

問題行動は、機能不全の何らかのメッセージであり、これからの私たちの生活に大きな改善をもたらすであろうと思われる。

私の生きるテーマになっている、アスペルガー症候群であるが、その問題に類似した減現象の取り組みを、国は懐に入れて考え直すときがきていると思う。

違うことをいちから否定し、無視するだけでは、機能不全国家の行く先は危ぶまれてならないことを多くの人が気付いて考え直すべきときである。